

2022.9

秋冬

No.115

思文閣出版

鴨東通信



◆ 日常語のなかの歴史 28
げすい【下水】

◆ 市川秀之

◆ てーたいむ

◆ 仏師快慶の魅力に迫る

なぜ快慶の仏像は人々を魅了するのか――

◆ 山口隆介

村上春樹と学芸員人生

◆ 尾崎信一郎

ヴルツブルクのシーボルト

◆ 堅田智子

エッセイ

帝国の維持と滅亡――中国、唐の場合――

◆ 新見まどか

未紹介の造内裏関係史料

――写本に恩返しされた話――

◆ 新井重行

◆ ミレニアル世代の研究 レシピ 2
Back to the 大いなる幻影

◆ 福島可奈子

◆ 史料探訪 76

双柏文庫の肖像画「石井利延像」
「石井利昌像」

◆ 仁方越洪輝

仏師快慶の研究

二〇二三年冬刊行予定

B4判上製函入・約五六〇頁／

定価 七七,〇〇〇円

二〇一七年に奈良国立博物館で開催された特別展「快慶——日本人を魅了した仏のたち——」では、現在知られていない快慶作品の約8割が一堂に会する史上空前の内容が実現した。この快慶展とその後の調査で得られた知見を、快慶全作品の大判カラー写真とともに収録した快慶研究の決定版。

【予定内容構成】
序・凡例・目次

図版編

在銘作品

- | | |
|----------|----------------|
| 1 弥勒菩薩像 | (アメリカ ボストン美術館) |
| 2 重要文化財 | 弥勒菩薩像 |
| 3 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 4 重要文化財 | 大日如来像 |
| 5 国宝 | 阿弥陀如来および両脇侍像 |
| 6 重要文化財 | 四天王像 |
| 7 重要文化財 | 執金剛神像・深沙大將像 |
| 8 重要文化財 | 孔雀明王像 |
| 9 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 10 重要文化財 | 菩薩面 |
| 11 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |

- | | |
|-----------|--------------------|
| 12 菩薩像 | (静岡 伊豆山浜生協会) |
| 13 国宝 | 僧形八幡神像 |
| 14 重要文化財 | 如来像 |
| 15 重要文化財 | 頭部 |
| 16 重要文化財 | 手(アメリカ ハーバード大学美術館) |
| 17 国宝 | 金剛力士像 |
| 18 国宝 | 文殊菩薩像および侍者像 |
| 19 大日如来像 | (奈良 安倍文殊院) |
| 20 阿弥陀如来像 | (東京芸術大学) |
| 21 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 22 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 23 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 24 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 25 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 26 阿弥陀如来像 | (和歌山 遍照光院) |
| 27 地藏菩薩像 | (奈良 如意寺) |
| 28 地藏菩薩像 | (奈良 如意寺) |
| 29 重要文化財 | 執金剛神像・深沙大將像 |
| 30 阿弥陀如来像 | (奈良 金剛院) |
| 31 重要文化財 | 地藏菩薩像 |
| 32 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 33 重要文化財 | 地藏菩薩像 |
| 34 重要文化財 | 十大弟子像 |
| 35 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 36 重要文化財 | 阿弥陀如来および両脇侍像 |
| 37 釈迦如来像 | (和歌山 光臺院) |
| 38 阿弥陀如来像 | (キーンベル美術館) |
| 39 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 40 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 41 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 42 重要文化財 | 金剛薩埵像 |
| 43 重要文化財 | 千手観音像 |

資料編

- | | |
|-----------|--------------|
| 44 菩薩像 | (京都 勝勝寺) |
| 45 菩薩像 | (京都 フリーア美術館) |
| 46 阿弥陀如来像 | (奈良 知恩寺) |
| 47 阿弥陀如来像 | (大阪 藤田美術館) |
| 48 観音菩薩像 | (奈良 地蔵院) |
| 49 観音菩薩像 | (奈良 地蔵院) |
| 50 重要文化財 | 金剛力士像 |
| 51 重要文化財 | 善導大師像 |
| 52 不動明王像 | (奈良 来迎寺) |
| 53 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 54 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 55 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 56 阿弥陀如来像 | (奈良 正法寺) |
| 57 重要文化財 | 西大門勅額付属八天王像 |
| 58 重要文化財 | 不動明王像 |
| 59 重要文化財 | 聖観音像 |
| 60 菩薩形像 | (奈良 正法寺) |
| 61 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 62 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |
| 63 重要文化財 | 阿弥陀如来像 |

作品解説
年表
快慶主要参考文献
英文 作品一覧・目次・凡例・序

銘文
納入品X線CT写真一覧
「作善集」影印・翻刻
論文 山口隆介「快慶の生涯と「如法」の仏像」
奥健夫「快慶と生身信仰」
三本周作「快慶作品における金属製法・金工をめぐって——仏師と金工をめぐって——」
山口隆介「X線CTスキャン調査からみた快慶作品の構造とその特色——三尺立像を中心に——」

日常語のなかで、
歴史的語源や
エピソードを取り上げ、
研究者が専門的視野から
ご紹介します。

げすい 下水

大阪市中央区和泉町に、背割^{せわり}下水をのぞき込んで見学できる施設がある。ビル街のただなかにあるが、それに気づく人も少ない。大阪の背割下水は、家々の裏側を流れ、町の境界ともなっていた排水路で、豊臣秀吉が作ったとされることから太閤下水とも呼ばれる。総長一二〇キロにも及ぶ大暗渠^{おんきょ}で、現在でも一部は利用されている。太閤下水というものの、実際のところは大阪夏の陣のあとの盛土部分に施工されており、江戸

期のものである。

この背割下水を丹

念に調査した山野

寿男さんによれば、

背割下水は近世の絵図などには「水道」と記されているという（『背割下水の研究——近世大阪の水道——』）。

以前に「下水」の語の初出を知りたくて随分と文献を探したが明確な答えを得ることはできなかった。ただ、江戸では正保五年（一六四八）の町触に、「下水」と「表の溝」のごみ浚えをきっちりするように、という内容のものがあるので、近世初期からすでに下水の語は用いられていたようである（栗田彰・柳下重雄

『江戸下水の町触集』）。お茶の水の東京都水道歴史館には江戸の街並みを水利用を中心に復元した展示があり、道の中央に板で蓋をされた排水路も復元されている。これこそが「表の溝」で、雨水の排水を目的とするものであろう。台所などから出た生活排水は家の裏を流れる下水に落とされ、それはやがて河川へと流れ込んでいた。江戸では、近世初期から神田上水、玉川上水などの上水道が敷設されており、これと区別するために早くから下水の語が用いられたのだろうか。大きな人口を抱えながら、なぜか近世には上水道が施工されなかった大阪では、両者を区別する必要がなく下水も長く「水道」と呼ばれたものと思われる。

このように下水は上水と対比してとらえられてきたが、現在でも上水に比して地味な存在であることは確かである。下水が生活に不可欠なものであることを否定する人はいないだろうが、日々お世話になっているながらそれを意識することすらほとんどない。下水という言葉のみに、地味さの責を負わせるのは少し酷だろうか。

てーたいむ

仏師快慶の魅力に迫る

——なぜ快慶の仏像は
人々を魅了するのか

やまぐち すけ
山口隆介

(奈良国立博物館主任研究員)

今冬、快慶の全作品を収録した、大型図録『仏師快慶の研究』を、奈良国立博物館編にて刊行します。平成二十九年（二〇一七）に同館で開催された特別展「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」の担当者であり、大型図録を編集された山口隆介先生に、快慶研究や大型図録の魅力をお聞きます。

■研究対象としての快慶

——先生は快慶作品の研究を続けられていますが、他の仏師の作品と比べて、どのような魅力があるのでしょうか。

快慶といえば、中世以前の仏師の中では群を抜いて現存作品が多い。これが第一の魅力です。たとえば十年ごとの「点」でしか作品が残っていないと、それが特殊なものなのか、その当時のス

タンダードなのか、それすらも判断が難しい。特殊かスタンダードかわからない点をつないで、その人物の生涯を語るというのは、なかなか難しいものです。ところが快慶の場合、銘記などにより彼の作と認められている作品が四十数件もあるので、ひとりの仏師の作風の変遷を具体的にたどることが出来ます。

もうひとつは、作風があまり変化しないこと。運慶は注文主やそのときどきの状況に応じて、仏像の形姿を劇的に変化させます。運慶は同じものを造るのがあまり好きではなかったのではないのでしょうか。一方、快慶はひとつの「型」ができあがると、そこにわずかな変化をくわえることはあっても、大幅には変えません。ですから、微妙な変化がうかがえる点も、おもしろいところです。運慶の仏像の前に立ったときに、心動かされた経験は少なくあ



山口氏

りません。平成二十五年（二〇一三）に、興福寺南円堂と北円堂が同時に公開されたことがありましたが、そのころ南円堂に運慶作の可能性が高い四天王像が安置されていて（現在は中金堂所在）、なんといつてもそれら一具像が発するエネルギーと、迫力に満ちた造形に深い感銘を受け、毎日拝みに行きました。運慶の仏像は実在感にあふれ、仏の圧倒的なちからで我々を救い導いてくれるように感じます。一方、快慶の仏像はどこまでも静謐で、ある意味では抽象的です。像の前に立つと思わず手を合わせてしまうような、祈りの対象として拝みやすいように思います。

生涯にわたりみずからの作風を劇的に変化させた運慶とは対照的に、快慶は平安時代後期の平明なたちを基調としながら、ここにわずかに新味をくわえることで理想的な阿弥陀如来の姿を追求しつづけました。どれも個性的な運慶の作品と比べたとき、快慶の阿弥陀如来像は変化に乏しいつまらないものと誤解されがちですが、そうした評価はいかにもナンセンスです。

混乱した時代にあつて、快慶が阿弥陀如来像を造りつづけたのは、その端正で親しみやすい姿を多くの人びとが仏の理想像と確信し、こぞつて求めたからにほかなりません。いま仏具店でのぞけば、そこに快慶が確立した「安阿弥様」の阿弥陀如来像があるように、じつは現代に生きるわたしたちの身近なところ

にも、安阿弥様は仏の一典型として生きつづけています。これが快慶の偉大な功績なのです。

■理想的な仏の姿を生み出した高潔さ

快慶作品を研究する魅力はほかにもあります。

運慶は仏師の家の長男として生まれましたが、一方の快慶は師匠である康慶（運慶の父）にとつては血のつながらない弟子でした。それゆえ運慶に比べて昇進が遅れるなど、社会的な身分には歴然とした違いがあります。ところが、快慶はデビュー間もないころに天皇追善のための仏像を造ったり、長谷寺十一面観音像や清涼寺釈迦如来像といった史上名高い靈験あらたかな像の再興や修理に抜擢されたりと、並の仏師ではないことをうかがわせるエピソードがいくつも知られています。

快慶の生涯をたどつてみますと、初期の醍醐寺三宝院弥勒菩薩像以降、彼の手がけた仏像がしばしば如法（にほふ）という言葉で語られ、その仏像制作の作法から如法仏（仏の教えに忠実に造った仏像）として造られたとみられるものが少なくないことに気づかれます。そもそも如法仏の造立は、十世紀後半ごろより流行した、心身を清め、動物の毛や膠（にかわ）を用いない石墨草筆で一字三礼して書写する如法經との関わりのおかげでおこなわれるようになったとされています。

六人の子息をしたがえて工房を構えた運慶に対し、快慶には実子がいた形跡がなく、信仰を共有した同行衆とともに仏像を制作した点も、齋戒（さいかい）をおこなった、つまり行動を慎んで心身を清浄に保った信仰者としての一面を伝えています。

長谷寺十一面観音像や清涼寺釈迦如来像といった霊像の修理や再興を託されたのは、持戒の仏師たる快慶の特別なちからが期待されたからにほかなりません。多くの人びとが快慶の仏像を求めたのは、彼が造り出す仏の姿に理想像をみたからでしょう。そして、斎戒を持して如法に仏像をつくることを意識しつづけた、信仰者としての快慶の生き方に共感したからでもあったのです。

——快慶作品の銘記には、自身を「**我阿弥陀仏**」と記すものもありました。

文治五年（一一八九）に造ったアメリカのボストン美術館所蔵（興福寺旧蔵）の弥勒菩薩像には「仏師快慶」と記されています。ところが三年後の醍醐寺三宝院の弥勒菩薩像では、「**我阿弥陀仏**」とあります。これは、みづからが阿弥陀信仰者であるということの表明ですが、このころ快慶は東大寺再興を指揮し、「南無阿弥陀仏」と名乗った重源ちゅうげんに出会って彼の阿弥陀信仰に共感し、「**我阿弥陀仏**」の阿弥陀仏号を与えられたと考えられています。やがて快慶は重源に関わる仏像制作の担い手となります。東大寺再興造像で康慶・運慶父子とともに、大仏師のひとりとして快慶が起用された背景には、康慶の有力な弟子ということにくわえて、重源の推挙もあったのでしょう。

このように人となりといいますが、身の処し方まで推し量ることのできる仏師は稀です。

■作品の特徴

——銘記以外にも**快慶作だとわかるポイントがありますか**。

快慶が造る仏像の耳の形には決まった特徴のあることが知られています。通常、仏像制作は経典などにもとづいておこなわれますが、詳細には説かれません。そのため、耳の形には無意識のうちに作り手の癖があらわれるのです。このことは、今から六十年前も前に水野敬三郎先生（東京芸術大学名誉教授）が明らかにされました。さらに、その後の研究で快慶作品のなかに左右で耳の形が異なるものがあることも注目されています。仏師の利き手による違いの可能性もありますが、むしろ快慶工房において、ひとつの仏像を複数人で制作する際に左右の耳を別の仏師が担当したことを示唆しているのでしょう。快慶の工房制作の実態がうかがえる興味深い事例です。

このほか、快慶作品のみどころとして金属製の装身具があります。醍醐寺三宝院の弥勒菩薩像など、なかなかおしやれな胸飾りを付けていますが、『日本彫刻史基礎資料集成』（中央公論美術出版以下『基礎資料集成』）では後補、つまりのちの時代に補われたものとみなしています。今回の大型図録では金剛峯寺孔雀明王像や藤田美術館（興福寺旧蔵）地藏菩薩像の胸飾りも含めて像と同時代のものと考えました。従来、後補とみなされてきた装身具についても半頁ぐらいの大きさを掲載しますので、より多くの方に当初かかっているいは後補かの検証をしていただければと思います。

——今回、像内納入品もたくさん掲載されていますが、一般的な
ことなのでしょうか。

たとえば平等院鳳凰堂の阿弥陀如来の像内には、心月輪しんがらんと称される蓮華に見立てた仏の魂が納められています。このほかにも、法華經を書写して像内に納めた事例があるなど、像内への納入という行為自体は古くからみられます。

しかし、仏像を造るということ、像内に品物を納めるということ、そしてそのことに多くの人が関わるという勸進のシステムみたいなものを、快慶は同時代の僧侶たちとともに確立させていった形跡があります。

たとえば、遣迎院（京都）に安置される、現存する快慶最初期



本文組見本 阿弥陀如来像（兵庫 浄土寺）

の阿弥陀如来立像の像内には巻物が納められていて、その内容から造られたおおよその時期や、一万二千人もの人びとが像に結縁けちえん、つまり縁を結んだことがわかります。

仏像は木材などで造られた偶像ですが、それをいかにして生きたものにするかということを考えたときに、ひとりのお金持ちが大金を出して造るよりも、名もなき人たちを含めた多くの人が力を合わせて造るほうが仏像としての聖性、すなわち聖なる力が高まると考えられたのでしょうか。快慶による端正な姿の阿弥陀如来立像の成立とほぼ時を同じくして、多数の結縁を募る組織的な勸進のシステムも成立したことがうかがえるのです。

■大型図録の特色と快慶研究の最前線

——特別展「快慶」の図録刊行後に、あらためて大型図録を作ろうと考えたのはなぜでしょうか。

まず前提として、快慶を単独で取り上げた展覧会は、今から四十年以上前（一九七九年）に奈良博で特別陳列「大仏師快慶」という小規模な展示がありましたが、特別展での開催は二〇一七年が初めてでした。

ですので、快慶展の図録はカタログ・レゾネといいますが、快慶研究の決定版的なものを作ってやろうという意気込みで（笑）取り組みました。浄土寺阿弥陀三尊像や安倍文殊院文殊菩薩像などの大作は、新規の写真撮影のご許可をいただき、高精細で魅力的な図版を掲載することが叶いました。さらに、資料編をもうけて銘文や彩色・切金文様、像内納入品の情報を余すところなく盛り

込み、イメージどおりの図録ができたと思っています。

しかし、今回あらためて大型図録を作ろうと思ったきっかけのひとつに、展覧会の会期中に実現したX線CTスキャン装置の導入があります。みなさんのイメージしやすいところですと、病院でドーム型の機械に入って体を輪切りに撮影し、内臓の健康状態を調べる。これの文化財専用の装置が導入されたことで仏像の木取りや木寄せの方法、さらには像内に納められた品々の情報を詳しく知ることができるようになり、快慶作品の納入品に関する情報が飛躍的に増加しました。

快慶の仏像には保存状態のきわめてよいものが多く、それらは過去に解体された形跡もないので、像内の品々が制作当初の状態のまま納められているケースが少なくありません。過去に実施されたX線透過撮影、すなわちレントゲン調査で像内納入品がぼんやり確認されていた作品は複数ありますが、それらの納入品は紙製なのか布製なのか、金属と紙の違いであればレントゲンでもわかりますが、それ以上の詳細はわかりませんでした。それがCT調査によって大きさはもとより、形状から素材にいたるまでかなり詳しくわかるようになったのです。

さらには、当時奈良博でCT調査を担当していた保存科学担当の鳥越俊行さん（現東京国立博物館）が、千載一遇の機会だからというこで、アメリカの美術館との交渉を重ねてCT調査の承諾を得たことも大きかったように思います。アメリカ所在の快慶作品のCTデータを奈良博に残せたことも、大型図録を作るきっかけになりました。

それから、博物館ではひとつの展覧会が終わると、すぐさま次の展覧会の準備に取りかからなければならないというのが実情で、過去のことを振り返っている余裕はほとんどありません。快慶展も例外ではありませんでしたが、展覧会終了後、研究者のみならず一般のお客様からも、展覧会で得られたさまざまな成果を広く公表してほしいといった要望が寄せられました。

さらに、研究費に関する課題もありました。展覧会の準備段階であれば、出品作品の調査や撮影のための予算がある程度認められていますが、展覧会が終わってしまえば当然のことながら快慶の研究のために使えるお金はありません。展覧会を通じて得られたさまざまな知見を公表するため、そして信仰上の理由や保存状態の問題から展覧会への出品が実現しなかった作品を調査するために科学研究費を申請し、助成していただけることになりました。これを元手に実施した追加調査でもさまざまな成果が得られ、さらに充実した本を作る準備が整いました。

CT調査により画期的な成果が得られたこと、多くの方々から成果公表に関するご要望をいただいたこと、そして追加調査においてもさまざまな成果が得られたことにより、このたびの出版にいたしました。

——大型図録の独自性と今後の展望をお聞かせください。

今回、図版のレイアウトを組むのに予想以上に苦勞し、ずいぶん時間を要しました。そもそも、快慶作品は『基礎資料集成』にすべて収録され、詳細な解説が付けられています。図版はほぼモ



本文組見本 文殊菩薩像 (奈良 安倍文殊院)

ノクロですが主要なカットを網羅しており、研究者にとつてはバ
イブルともいえるべき叢書です。ですから、これと同じような本を
作っても売れないし、おもしろくもない。大型図録を何とか特色
あるものにしうと考へた結果、大判であることやカラーである
ことを生かして、たとえば顔の図版を一頁大で大きく載せて細部
までみせ、金属製の装身具や表面の切金・彩色文様の図版をふん
だんに盛り込むなどして、マニアックなニーズにも応えられるよ
う工夫しました。

また、快慶作品を制作年代順に並べてみて気づいたこともあり
ます。快慶の三尺阿弥陀は襟のかたちが活動時期にしたがつて三
段階に変化し、制作時期の幅が押さえられることが知られていま

すが、今回レイアウトを組む過程で三尺阿弥陀を年代順に並べて
みると、従来の法則では理解しきれないのではないかと思われる
像も出てきました。

『基礎資料集成』は正面全図以外の図版はA4判の四分割が多い
のでやや小さく感じられます。大型図録ではB4サイズの大判で、
主要なカットのほとんどをカラーで収録しますので、多くの方に
この図版を眺めていただくことにより、今まで誰も気がつかなか
ったような新たな発見があるのではないかと期待しています。

(令和四年七月七日 於・奈良国立博物館)

奈良国立博物館編

仏師快慶の研究

二〇二三年冬刊行予定

▼詳細は表紙裏参照

B4判上製函入・五六〇頁(カラー四六八頁+モノクロ九二頁)／定価七七〇〇円

村上春樹と学芸員人生

尾崎信一郎
おさき しん いちろう

村上春樹は私のお気に入りの作家だ。『風の歌を聴け』から『一人称単数』まで、私はほぼタイムラグなしに読み継いできた。村上の小説でしばしば舞台となるのは図書館であるが、私はある時、図書館ならぬ美術館、司書ならぬ学芸員という自分の仕事と村上の小説の共通点を発見した。

学芸員の仕事を始めて今年で三十五年、これまで四つの美術館と博物館で私は数多くの展覧会を企画してきた。数年かけて全力で打ち込んだ展覧会もあれば、機械的に担当を任されてさほどの準備なく組み立てた展覧会もある。どの展覧会も私にとって楽しい思い出であり、学びがあるとはいえ、やはり時間と手間をかけて準備した展覧会ほど思い入れは深い。経験から得た教訓として、私は常々若い学芸員たちに言っていることがある。学芸員であれば常にタイプの違う三つの展覧会を準備しておくこと、一つはすぐにも作品を借りてきて展示するくらい勢いで取り組める展覧会、二つ目は一年から数年程度の時間をかけて実現する標準的な展覧会、三つ目は四、五年かけてじっくり考え抜いたうえで実現に向かう展覧会だ。実際に私はいずれのタイプも経験がある。予

定していた展覧会が流れて大急ぎで組み立てた場合もあれば、国立館に勤務していた頃は何年後に大きな展覧会を任されるかおおよその予測がつくので、それに合わせて数年かけて企画を考えた。

私は一九八七年に兵庫県立近代美術館で学芸員としての仕事を始めた。最初は副担当として展覧会に携わり、先輩学芸員から多くを学んだ後、ひょんなことからローマ国立近代美術館における具体美術協会の展覧会のコミッショナーを務めることになった。まだ二十代であり、恐ろしいほど無知であったが、若さだけで乗り切った展覧会であった。一九九〇年のことだ。次に勤務した国立国際美術館では逆に自分の力で海外から作品を借用する展覧会を企画したいと考えた。そのために国立美術館に移ったといってもよい。九七年の「重力―戦後美術の座標軸」はこのような思いを実現した展示であり、現代美術に関わる国際展としては欧米の一流美術館のそれと比べても遜色のない内容であったという自負がある。京都国立近代美術館に移って〇四年に企画した「痕跡―戦後美術における身体と思考」がこれに続く。テーマリックな展覧会は展覧会としては一番難度が高く、実際に重力と痕跡という二

つのテーマを見出すまでにいずれも数年の時間を要したが、いずれもモダンイズム美術への対案を提起するという点で意義のある試みであったと思う。

さて、村上春樹だ。今挙げた三つの展覧会が開かれた年に注目していたいただきたい。九〇年、九七年、〇四年、正確に七年の間隔があることが理解されよう。これは村上春樹が長編を発表する間隔に等しい。『ノルウェイの森』が八七年（私が仕事を始めた年だ）、『ねじまき鳥クロニクル』が九四年、『海辺のカフカ』が〇二年、『1Q84』が〇九年とやはりほぼ七年の間隔で長編の発表が続く。村上春樹は短編、中編、長編、いずれもコンスタントに発表を続けているが、それぞれを先に示した展覧会の三つのタイプに準えることができるのではないだろうか。私も学芸員の常としていつも各種の展覧会に追われてきたが、それらを中短編ととらえるならば、自分の中で長編とも呼ぶべき手ごたえのある展覧会を準備するためには村上春樹が長編の執筆に費やした同じ年数が必要としたのである。二〇〇六年に郷里の博物館に戻ってからこのサイクルは変わらなかった。一〇年の「生誕一〇〇年 彫刻家辻晉堂展」と一六年の「日本におけるキュビズム」という二つの展覧会がこれにあたる。今振り返るならば、内容も体制も全く異なるこれらの展覧会が私の学芸員人生の里程碑となっている。

日本の学芸員が担当する仕事は多岐にわたる。展覧会に関わる業務に限っても企画書を作成し、作品の出品交渉に赴き、輸送や保険の段取りから展示の構成や作品の配置をあらかじめ考え、最後には自らトラックに同乗して作品の借用に赴く。取り組んでい

る展覧会が自分にとって『騎士団長殺し』と「ドライブ・マイ・カー」のいずれに相当しようが、展覧会とは本来の所蔵先から作品を借用して配置する、つかのまの営みであることに変わりはない。展覧会は会場写真と記憶の中にしか残らないが、展覧会のカタログは永続する。このような理由によって私は展覧会に関わる仕事の中でもカタログの制作を重視してきた。そして実際今挙げた多様な業務の中でも自分が一番得意なのは作家や作品に言葉を与えていく作業、つまりカタログ論文の執筆であるという自負があったから、私は自分が主体的に関わった展覧会に関しては可能な限りカタログに論文を執筆するようにここがけてきた。このたび思文閣出版からこれらの文章をまとめた論集を刊行する機会を得て、まずは私の学芸員としての仕事の原点とも呼ぶべき一九五〇年代の関西と関わる論文を中心にまとめてみた。長編、中編、短編の展覧会を取り交ぜて、テキストを執筆した時期は一九九〇年から二〇二〇年まで。これもまた私の学芸員人生の里程碑となるはずである。

（鳥取県立美術館整備局 美術振興監）

尾崎信一郎著

『戦後日本の抽象美術——具体・前衛書アンフォルメル』

A5判上製・五二八頁

▼詳細22頁

ヴェルツブルクのシーボルト

堅田^{かた}智子^{さとこ}

ドイツ・ヴェルツブルクの街角に、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) の胸像がひっそりとたたずんでいる。鬱蒼とした木々に囲まれ、竹で組まれた案内板を見なければ、通り過ぎてしまう。筆者がここを初めて訪れたのは、一九九六年、小学三年生の夏のことだった。眼光鋭く遠くを見つめるシーボルトよりも、台座にしがみつくアジア風の笠を被った天使に目を奪われた。

数年ごとに夏休みを利用し、一カ月近くドイツに滞在するのが、我が家の恒例行事だった。法哲学、法思想史を専門とした父は、自身の興味関心にもとづいて旅のテーマを定め、家族で暮らし、滞在の拠点としたハイデルベルクからの小旅行先を決めた。一九九六年はフィリップ・フランツ生誕二〇〇年であり、父がこの機会を逃すはずなどなく、江戸東京博物館で開催されていた「シーボルト父子のみた日本」を見学し、ヴェルツブルクで開館間もないシーボルト博物館を訪れ、帰国後に大津市歴史博物館での「シーボルト家の二百年展」を見学するという、シーボルト一色の一年を過ごすこととなった。江戸東京博物館でのシーボルト展では、ラ

イデン、ミュンヘンの国立民族学博物館が所蔵するシーボルトコレクションが展示された。父は博物館に行けば、予習の成果を発表するかのようにならず解説をした。だが、あの時は父の説明など耳に入らず、鬼のような形相で夫に怒りをぶつける妻とただただ委縮する夫の生き人形、木製の入れ歯など、どのように蒐集したのかと想像せずにはいられない品々に魅了された。シーボルトを知り、シーボルトの見た江戸時代の日本にふれたのである。

「シーボルトという人について」、これが筆者の最初のシーボルトに関する論文である。論文といっても、小学生の夏休みの自由研究だ。シーボルト展で配布された子供用パンフレットを資料に、二度の日本滞在、シーボルト事件、シーボルトコレクションについて、拙い文字ながら原稿用紙を一〇枚近く使い叙述した。

読み返して驚くのは、いま筆者が研究の中心に据えているアレクサンダー・フォン・シーボルト (Alexander von Siebold, 1846-1911) の名が登場することだ。フィリップ・フランツは、日本地図の持ち出しが発覚し、一八二九年 (文政一二)、国外追放処分が科された。日蘭修好通商条約の締結にともない、国外追放処分が解除され、一

八五九年八月（安政六年七月）、一三歳の誕生日を目前に控えた長男アレクサンダーと再来日をはたした。アレクサンダーは父の帰国後も日本にとどまり、英国公使館に日本語通訳として勤務し、一八七〇年（明治三）に民部省雇に転じ、以後、大蔵省雇、外務省雇として四〇年にもわたり、明治日本に奉職した。その活躍ぶりは、同時代人から「日本帝国近代史の化身」と評された。

日独関係史、広報文化外交（パブリック・ディプロマシー）を専門とする筆者は、アレクサンダーが外交官人生を賭して取り組んだ広報外交に着目している。アレクサンダーの外交理念を明らかにするとともに、また〈視覚〉による広報と〈文字〉による広報を駆使し、アレクサンダーが諸外国に発信しようとした日本イメージがいかなるものだったかを考究している。

あの夏、ヴェルツブルクでシーボルト像を探し、ようやく辿り着いた時のこと、あの天使を見つけた驚きを今でも鮮明に覚えていいる。アルバムを見返せば、シーボルト博物館の前で満面の笑みを浮かべ、ただ純粹にシーボルト家やシーボルトコレクションに心を奪われた小学生の時の自分と「再会」できる。二〇年以上経っても、結局のところ関心は変わらないのである。

アレクサンダー研究を始め、シーボルト家や日独関係史関連のシンポジウム、研究会に参加するようになった。もちろん、シーボルト研究やシーボルト展を企画・運営した「先人」たちと一緒にすることも多い。ある研究者に「あの特別展は非常に労力を費やしたけれど、こうして一人の研究者を生み出せただけで大きな成果があったし、報われたと思う」と言葉をかけていただいたと

きには、シーボルト家との出会いも偶然ではなかったと感じたものだ。近年は国立歴史民俗博物館のプロジェクトに参加し、シーボルト家の私資料を所蔵するドイツ・シュルヒテルン近郊のブラデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴで資料調査をしている。資料を一点ずつ手に取り記録し、画像を撮影していく。地道な作業だが、連綿と続くシーボルト研究の最前線にいると実感できるのは、歴史家冥利に尽きる。

歴史家がどのような人生を歩んできたか、あるいは現在をどのようにとらえているか、それが歴史家の問題意識や研究テーマの選択に直結することは、歴史学を専門とする者にとって自明のことである。「歴史に『もしも』はない」が、父とシーボルト展を見学していなければ、今の筆者はなかっただろう。フィリップ・フランツが二度目の来日にアレクサンダーを同行させたのは、みずからの「生き証人」とするという明確な目的があった。アレクサンダーに歴史家として心惹かれるのは、みずからの関心と担うべき役割を理解し、確固たる強い意志のもと、父とは別の道を歩んだ彼の姿に自身を重ねるからかもしれない。

自宅の書斎には、父がヴェルツブルクのシーボルト博物館で購入した記念切手と紫陽花のラベルが貼られたフランケンワインのボトルがある。あの時の父と対話できるのなら、人生を賭して追求できる研究テーマと出会えた今の筆者にどのような言葉をかけるだろうか。

（関西学院大学教育学部助教）

帝国の維持と滅亡——中国、唐の場合——

新見まどか

「国破れて山河在り、城春にして草木深し」——中国の詩人杜甫による、「春望」と題した詩の冒頭である。国が破れた。そう謳われれば、誰もがこの国は滅んだと思うだろう。

杜甫が生き、その詩に詠んだ国の名は「唐」。七世紀初頭から十世紀初頭まで、中国を中心に一時はモンゴル高原、中央アジアまで支配し栄えた帝国であった。シルクロードを通じて国際色豊かな文化が流れ込んだこの時期は、日本もたびたび遣唐使を派遣し、法律や制度、仏教などを学んだ。

だがその栄華は、突如勃発した安史の乱（七五五―七六三年）によって破られた。冒頭で紹介した杜甫の詩は、この乱によって荒廃した都の姿を嘆じたものである。

ただし、国は滅んでなどいなかった。唐は、以後なんと一五〇年近く存続する。

この脅威の粘りにこそ、唐という王朝の底力がある。確かに後半期の唐の領域は、前半期に比べて大幅に縮小した。モンゴル高原では遊牧勢力のウイグル帝国が、チベット高原では吐蕃帝国がそれぞれ勢力を伸張させ、かつて唐に莫大な富を齎したシルクロ

ードは彼らの勢力下に入った。だが唐はこの状況に、柔軟な体制変換で応じた。

特に象徴的なのは、藩鎮という新興勢力に地方統治を半ば委任したことである。藩鎮とは聞きなれない単語かもしれないが、軍事司令官である節度使などが長官となり、複数の州に跨る広域的な領域を支配した軍閥である。本来、中国の王朝では全土を皇帝が直轄統治するのが理想であったが、唐は軍閥に地方統治の権限を与えたのである。

従来、この藩鎮はあたかも唐を弱体化させた戦犯のように描写され、その活躍も「跋扈」と表現されるなど、批判的な評価が主流であった。しかし後半期の唐の歴史は、藩鎮なくして語れない。実は藩鎮には地域ごとにそれぞれ役割分担があり、ごく大雑把に言えば西方から北方は外庄に対する防衛を担い、東方から南方は財源地帯として機能し朝廷を支えた。この藩鎮を利用した地方統治システム——藩鎮体制があったからこそ、唐は安史の乱後も統合を維持し続けることができたのである。

しかも藩鎮体制は国内統治のみならず、対外問題ともかわる

ものだった。ある節度使はウイグル帝国の王女と婚姻関係を結んで唐に反旗を翻し、またある節度使は日本や新羅・渤海との交易を試みた。九世紀半ば、日本最後の遣唐使の一員として渡唐した僧侶である慈覚大師円仁も、藩鎮に属した人々の協力を得て、十年に及ぶ求法の旅を成功させている。一般に、後半期の唐は前半期に比べて国際性を失ったと言われるが、実は唐の歴史は依然として国際情勢と密接に連動し続けていたのである。

さらに唐後半期には、教科書に決して登場しないような人々の活躍が目立つようになる。例えば「山棚」という山地狩猟民は、あるときは叛乱勢力に加担したが、一方でそれを鎮圧するための官軍としても利用された。また、ある大物商人は、自ら茶の密売という違法行為に携わりながら、政府から軍職を買って堂々と他の密売業者を取り締まった。彼らは合法と非合法の境界を自在に行き来し、強かに生き残りを図ったのである。

こうしたグレーゾーンを生きた人々は存外多い。兵卒ですらそうであった。唐は有事の際に必要な兵卒を募集する仕組みを取っていたが、この募兵に応じた人々の中には、普段密売や盗賊行為で生計を立てているアウトローが相当数いた。逆にいえば、生活が安定しない彼らにとって、戦争こそは稼ぎ時であった。

ところが九世紀の半ば、唐は国外の脅威であったウイグル帝国の滅亡と、国内における藩鎮叛乱の平定をきつかけに、抜本的な軍縮に乗り出した。戦争がなくなつたのだから、軍事費を削り兵卒をリストラするのは極めて合理的な判断に見える。だがこの時朝廷は、食い扶持を失った兵卒の行く末については配慮しなかつ

た。この、まるで現代にも通じるような施策が、唐滅亡への一つ目の道筋を作った。兵としての道を閉ざされ、賊へと転じた人々を糾合したのが、安史の乱に次いで名高い黄巢の乱（八七五―八八四年）である。

ただし唐には切り札があった。例えば国内で叛乱が起こっても、これを鎮圧できる圧倒的な軍勢力、それは唐の北辺で生活していた騎馬遊牧民たちだった。事実、安史の乱以来たびたび生じた諸叛乱のほとんどは、彼らによって平定されてきた。従来どおりこの精兵を迅速に投入すれば、鳥合の衆に過ぎない黄巢軍など大きな問題にはならなかつたであろう。

だが唐にとって致命的だったのは、黄巢の乱と同時にこの遊牧勢力までもが叛乱を起こしたことである。これが、唐を滅亡に導く二つ目の道筋となつた。自らを護る軍勢力を失った唐は、以後勢力を回復できず、九〇七年、約三世紀に及ぶ長い歴史を閉じた。多くの人は帝国創業者の偉業を称え、その成功の秘訣を問う。しかし「創業は易く守勢は難し」——いみじくも唐草創期の英主、太宗李世民が語つたように、実は帝国を維持することこそ難しい。安史の乱後における唐帝国の生命力とその滅亡は、我々にも大きな示唆を与えてくれるはずだ。

（大阪大学大学院人文学研究科助教）

新見まどか著

『唐帝国の滅亡と東部ユーラシア』

藩鎮体制の通史的研究』

▼詳細30頁

未紹介の造内裏関係史料

—写本に恩返しされた話—

新井重行あら い しげ ゆき

もともと皇室や公家が蒐集した文庫の書誌に関心があり、写本の調査などを行ってきた。古い本を手にとることで、それまで知らなかった事実を知るのには、純粹に楽しい。

あるとき、必要があつて写本をめぐっていると、表題の年号と内容の年代とが合わないことに気がついた。宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の『安政造内裡坪取御間数等諸式寛帳』という写本である。これは幕末の公家・野宮定功の筆になるもので、定功は安政度の内裏造営（嘉永七年（一八五四）の内裏焼失後、翌安政二年（一八五五）にかけて行われた）に関わった人物であるから、私はてっきり、安政度の内裏造営に関して、定功が作成した日誌のようなものかと思つて、この本を開いたのであつた。

ところが記載を辿つてゆくと、本文には「勢多（勢多章純）」「土山（土山武辰）」「裏松入道（裏松固禪）」など、寛政度の内裏造営の関係者が何度もあらわれる（寛政度の内裏造営は、天明八年（一七八八）に焼失した内裏を、寛政二年（一七九〇）にかけて再建したもので、安政度の一回前の内裏造営に当たる）。不審に思つて前後を繰り、どこかに年号の記載がないかと確認すると、「天明八年」「寛政元年」の文字が目に入

る。やはり寛政度の内裏造営についてのものらしい。この写本の本文は後欠だが、別に『安政新造内裡諸備忘』として整理されている写本が、これに接続することも分かった。

結局この二書は、書名からは分かりにくいだが、寛政度の内裏造営の際に作成された七つの帳簿をもとに、必要な記述を抜き出して、「紫宸殿」「清凉殿」など殿堂ごとにまとめ直したものと判明した。安政度の内裏造営は、焼失した建物を復元する方針であったため、前回の造営を参照する必要が生じたのであろう。

もとの七つの帳簿とは、すなわち①「造内裏坪取御間数御建具御絵様諸式寄帳」、②「天明八申年五月ヨリ丈尺坪取等往返抜書」、③「寛政元己酉年三月ヨリ御造営伺帳」、④「御普請方ヨリ伺帳」、⑤「御造営承知帳」、⑥「御指図御用坪取間尺丈尺之扣」、⑦「御屋根御柱御床御天井御門々廻廊ケ所付」である。幸いなことに、⑤の現物が、これもまた図書寮文庫に残されており、記載を比較することによって、両者が同じ帳簿であると裏付けることができた。この七つの帳簿のうちに、二種類の「伺帳」（③・④）があることにも注意して欲しい。実は「伺帳」の存在は以前から知られて

いた。寛政度の内裏造営にて御指図御用掛を務めた勢多章純の日記に、事務を取りしきる御指図御用掛と、その上役に当たる修理職奉行衆との間で、頻繁に「伺帳」がやりとりされることが記されているのである。その内容の記述が（殿舎）ことに切り離されてしまっているが、この二書のなかに伝わっていたのであった。

調べてみたところ、③は朝廷が管轄する大工からの申告、④は幕府が管轄する大工からの申告が主たる内容で、いずれも御指図御用掛が作成したものであることが分かった。江戸時代には、たとえ内裏の造営であっても、大規模な工事は朝廷の判断では行えないことになっていて、幕府方の大工と協業する形で行われた。寛政度においても同様である。ところが、幕府方の大工の意向は、幕府の役人を通して、伝奏衆に直接伝えられることがあり、指示の混乱もあったらしい。そこで、幕府方の大工の意向は御指図御用掛に伝え、こより上役に報告されることに改め、情報の一元化が図られた。その結果が二種類の「伺帳」である。ちなみに前記の⑤「御造営承知帳」は、修理職奉行衆からの指示内容を、御指図御用掛が書き留めたものである。これらの帳簿は、いわば連絡ノートのような役割を果たし、作業計画の修正などに現場が遺漏なく対応できるようにするための、事務処理における工夫なのであった。

ところで話は変わるのだが、この写本を紹介する小論（寛政度内裏造営に関する史料の検討——承知帳・伺帳を中心に——田島公編『禁裏・公家文庫研究』第八輯、思文閣出版、二〇二二年）を草したことが機縁となり、建築史専攻の方々による「中井家文書」の研究会に参加させ

ていただいている。

中井家は、江戸時代に京都大工頭を代々務めた家柄で（谷直樹「中井家大工支配の研究」思文閣出版、一九九二年などを参照）、関係史料は数カ所に分蔵されている。このうち図書寮文庫所蔵のものは、数度にわたる内裏造営に関する図面および帳簿からなり、順次公開されつつある。帳簿の多くは見積もりを書き上げたもので、建物に必要な部材はもちろん、人足の数や作業量なども計算され、細かいところでは箒や雑巾にいたるまで計上されている。文字だけの情報から、たちどころに上部構造を復元する議論を、もっぱら末席で聞いているだけなのであるが、内容は（私にとって）初めて知ることばかりで大変面白く、新たな史料を得て研究が大きく動く瞬間に立ち会っている、という感覚を覚えることもしばしばである。

ある写本のなかの、これまで気付かれることのなかった事実を紹介したことで、私は思いもかけず、新たな分野に接する機会を得、目を開かれた。写本が私に恩返ししてくれたのではないかと思っている。

（東京大学史料編纂所准教授）

田島公編

『禁裏・公家文庫研究』第八輯

Bう判上製函入・四三六頁／定価 一六五〇〇円

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第八輯。

Back to the 大いなる幻影

ふくしま かなこ
福島可奈子

映像メディアは機械仕掛けの作品である。縄抜けて「脱出王」の異名を取った奇術師のハリ・フーディーニ（一八七四—一九二六）は、一九二〇年代に大流行していた降霊術が、実は単なるトリックに過ぎないことを暴露した。一方で一九世紀から二〇世紀にかけて世界に視覚革命をもたらし、日本でも大流行する幻燈・活動写真等の映像メディアは、上映の段階で「機器」としての自らのトリック性を公衆の面前に絶えず晒してきた。しかし明治期にそれらを目にした大多数の民衆にとって、ガラスやフィルムに描かれた／現像された小さな世界が、はるかに大きな世界となつて白幕上に再現される仕組みについては、依然としてブラックボックスのままであった。

教育学者の唐澤富太郎（一九一—二〇〇四）の『図説明治百年の児童史（下）』（講談社、一九六八年）には、一九〇二（明治三五）年の天長節に幻燈を見たという或る少女の文章が載っている。

妾^{わたし}の村には青年倶楽部という会があります、妾の兄さんは會員の一人でありまして、此会で幻燈の器械を買ひ求める時に、金銭を寄付致しました。明治三十五年の天長節に幻燈会があ

りましたから、妾も見に行きました。すると、美しい画^えが白い幕に書た様に写りました、之れが開会というしるしでありました、今まで写つて居た画が消えて他の画が写りました、妾はあまりふしぎでしたから、兄さんの所へ行つて聞きますと、兄さんが器械のそばへ連れて行きました、そしてよく教えて下さいましたけれども只教えなかったのは、なぜ美しく写り又写ったのがどーゆーわけで消えるかと云う事でありました、其わけは妾が高等小学へ行けばわかるから、其れを楽しみに学校へ行かせる考でしょう。

この文章は『少年世界』明治三六年一月号からの引用となつてゐるが、雑誌の復刻版を調査したところ、該当の文章は見つからなかった。しかし引用文内に「明治三十五年の天長節」とあるから、おそらく同時期の少年雑誌に掲載されたものであろう。

現在でも、メディア考古学的実践としてイベント等で古い幻燈機や手回し映写機の上映を行うと、観客の子供たちが画面以上に気になつて見るのはむしろ装置の方である。筆者自身も学生の時に初めて手回し映写機での上映を見たとき、何よりも魅力的に感



明治期の幻燈スライド「開會」(池田都楽製)

この幻影を生み出すブラックボックス装置を間近で見知った瞬間、筆者の現在に至る映像メディア文化史研究が始まったと言ってもよく、それは明治期のこの少女と同じく「ふしぎ」が「どーゆーわけ」なのかの探究でもある。

ところでこの少女は高等小学校へ進学して幻燈の仕組みの謎を解明することができたのだろうか。明治三〇年代に青年倶楽部に所属して、安価でも一台一〇円以上(小学校教員の月給程度)の幻燈機購入のために寄付する兄を持つ少女の家は、地方の村の素封家だったのであろうから、高等小学校には入学できたかもしれない。だが学校で幻燈機等の光学の原理を知り興味を持ったとしても、その後の人生でそれを技術者や研究者として追究することは社会的にほぼ不可能であっただろう。戦前期の女子はその中等教育において、裁縫・手芸を中心とした良妻賢母育成の教育しか受ける権利を与えられていなかった。そのため明治期以降戦前までに生ま

れては消えていった幾多の映像メディア機器の製造は、色彩感覚が男性よりも優れているとされて積極的に女工が採用された幻燈のガラススライドやフィルムの彩色作業などをのぞいては、ほぼ男性の独占領域であった。受容においては、一八九七(明治三〇)年に渡来した映画「活動写真」が大流行して瞬く間に各地に拡がった映画館などでは、男女の好みの違いはあってもその観客比率に大差はなかった。

しかし大正末期ごろから百貨店などで販売され始めた高級玩具の映写機(いわゆる「玩具映画」)や小型映画カメラ等については、それらを購入したのがもっぱら都市部の比較的富裕な家庭の息子たちであった。戦前のホームシアターやホームムービー文化とは、いわばハイソなボーイズ・カルチャーなのである。その傾向は、既存のフィルム映画を上映するのみの玩具映画よりも、自身で撮影・現像・編集・上映をおこなえる小型映画の方が強い。たとえば現存する小型映画フィルムには、彼らがオープンカーに乗って大阪市街の市電と行き交う人々を撮影したものも残されている。これをひとたび小型映写機にかければ、現在の私たちもまた当時の彼らの視点で昭和初期の大阪市街をヴァーチャルで散策することができる。その追体験に性別や門地はもはや関係ない。その意味で、男性でも特権階級でもない筆者にとって戦前のメディア文化を探究することは、残された当時の幻燈機や映写機のレンズを通して、あの少女にとってブラックボックス(Camera obscura)のままであった世界に光を当てるといって、「過去の未来」からの開示請求なのである。

(武蔵野美術大学非常勤講師)

双柏文庫の肖像画「石井利延像」「石井利昌像」

仁方越洪輝

(大和文華館学芸員)

池をのぞむ丘の上に建つ大和文華館は、一九六〇年(昭和三五年)に近畿日本鉄道株式会社の創業五十周年を記念して開館した。おもに、日本および東洋の古美術を扱っている。美術館設立の構想自体は、古来より日本文化の育まれてきた地域に国際的な水準の文化施設を設立したい、という種田虎雄氏(当時の近鉄社長)の抱いていた理想が出発点であった。種田氏から依頼を受けた美術史家の矢代幸雄氏は、美術作品の鑑賞には周囲の環境も大切だと考えていた。周囲の自然環境にも配慮しながら美術館の立地が検討された結果、水辺に隣接し、松林の広がる高台が選ばれた。

門を抜け、背の高い木々に囲まれた坂道をのぼると、青空を水平に切る白い建物が見えてくる。桃山時代の城壁を思わせるデザインの建物は吉田五十八氏による設計で、名建築のひとつとしても名高い。

開館からさかのぼること一四年前の一九四六年には財団法人が設立され、作品収集はこのときから始められた。当初の作品収集

も、矢代氏の尽力によって進められた。収集開始の年には九七件の美術品を購入し、開館時点での作品数は七五八件であった。選定基準としては、「見て楽しむ価値があるか、否か」という点が重視されたようである(『私の美術遍歴』一九七二年)。初期に収集された作品のなかには、東洋美術の大収集家として名高い原富太郎(号・三溪)氏、益田孝(号・鈍翁)氏の旧蔵品も含まれており、コレクションの中核をなしている。その後も収集は続けられ、現在の所蔵は約二〇〇〇件である。年間を通じて展覧会を開催し、絵画、工芸品、考古遺物など幅広い分野にわたるコレクションのなかから、その時々テーマに応じた作品を順次公開している。また、特別展に際して刊行される展覧図録や美術研究誌『大和文華』には、日々の調査研究の成果が反映されている。

本稿で紹介するのは、「一笑一顰」——日本美術に描かれた顔——展に出陳中の肖像画である。大和文華館には、「双柏文庫」と呼ばれる古文書群も収蔵されている。歴史学者・中村直勝氏の

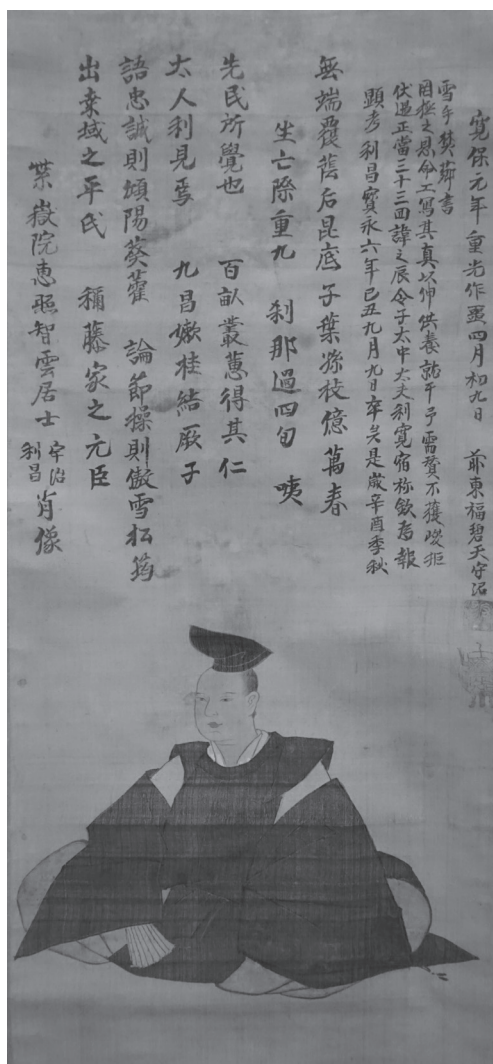
収集した古文書コレクションは「双柏文庫」と称され、一九七三年に大和文華館の所蔵となった。中村氏の教え子であった佐伯勇氏が、大和文華館の当時の理事長であった縁が契機になったという。双柏文庫の中心は古文書だが、そのなかに肖像画が二点含まれている。「石井利延像」「石井利昌像」とそれぞれ呼称されている。

「石井利延像」では、折烏帽子に狩衣姿で中啓を手にする男性が描かれる。顔貌表現を見ると、額、目尻、口元周辺などにはしわが刻まれており、年齢であることをうかがわせる。画面上部に賛があり、像主の姓は宇治、名は利延、家号が石井であったことに

続いて、九条家に長年仕えたことや一六八三年（天和三）に亡くなったことなどが記される。賛の末尾には一六九三年（元禄六）とあり、没後一〇年に当たって制作されたのがこの肖像画であったと知られる。

本稿掲載の画像は、双柏文庫のもうひとつの肖像画「石井利昌像」である。「利延像」と同様に折烏帽子・狩衣姿で中啓を持つが、より若い姿である。顔貌表現は、しわや凹凸を詳細に表さずあつさりとしているが、目・鼻・耳・頬の周辺にはごく薄く赤いぼかしを施している。また、鼻梁の墨線や輪郭線などに重なるように薄い朱線を引く。瞳は、茶色で虹彩を、濃墨で瞳孔を表す。朱線を引いて二重まぶたを表す。唇は輪郭をとって赤色で塗り、濃墨線で上唇と下唇の境を区切る。

衣は、赤い地色の狩衣に水色の袴を着す。袖の辺りに、地色よりも薄い赤色および金泥を用いて紋様を描いていたようだが、画面の織目の粗さと表面の荒れによって見えにくくなっている。袖くぐりの紐は青色で表す。左袖部分の衣文線に意



「石井利昌像」大和文華館所蔵双柏文庫

図的に強弱をつけているようだが、着彩が平板であるために立体感の表出にはさほど寄与していない。筆勢の乏しい衣文線や平板な着彩といった特徴からは、やや形式的な印象を受ける。しかし、衣全体の描写では粗雑さが目につくように思われる一方で、顔貌における線描や彩色は丁寧に施されており、人物描写に慣れた絵師の作例と考えられる。

「利昌像」に記される賛文は以下の通りである。左から右に向かって記されているため、原状に合わせて表記した。（「利延像」の賛も同様に、左から右に向かって記されている。）

寛保元年重光作噩四月和九日 前東福碧天守沼

雪手焚郷書

岡極之恩命工写其真以伸供養就于所需贊不獲峻拒

伏過正当三十三回諱之辰令子太中大夫利寛宿称欽為報

顕考利昌宝永六年己丑九月九日卒矣是歲辛酉季秋

無端覆蔭后昆底 子葉孫枝億万春

坐亡際重九 利那過四旬 嘆

先民所覺也 百畝叢蕙得其仁

太人利見焉 九昌嫩桂結厥子

語忠誠則傾陽葵藿 論節操則傲雪松筠

出桑域之平氏 稱藤家之元臣

紫嶽院恵照智雲居士 宇治利昌 肖像

像主である利昌の戒名と本名が記された一行に始まり、利昌の人物を称える言葉と、子孫の繁栄を祈念する文言が続く。また、利昌が亡くなったのは一七〇九年九月九日であり、三十三回忌に当た

る年に息子の利寛が肖像画を作って供養したという制作経緯も記される。賛の日付は一七四一年四月九日で、署名には「前東福碧天守沼」と記され、「守沼」朱文方印、「碧天」朱文鼎印が捺される。『東福寺誌』（一九三〇年）によれば、碧天守沼は一七四八年（延享五）四月二三日に八一歳で入寂した第二五六代東福寺住職で、その塔所は大機院だという。

絵画表現が抜群に優れているというわけではないものの、「利昌像」の顔貌描写における技術の高さは当時の肖像画制作の水準を語る資料として貴重だろう。利延と利昌の関係性などいまだ不明な点も多いが、本稿で取り上げ広く知っていただくことで、学術資料として研究者の利用に供してほしいという中村氏のご遺志に応えることができているれば幸いである。

大和文華館

【所在地】

〒631-0034
奈良市学園南1-11-6
TEL:0742-45-0544 FAX:0742-49-2929
ホームページ <https://www.kintetsu-g-hd.co.jp/culture/yamato/>

【交通アクセス】

近鉄・奈良線(学園前駅)下車、南出口より徒歩約7分

【開館時間】

10:00～17:00(入館は16:00まで)

【休館日】

月曜日(ただし、祝日の場合は開館し、翌平日が休館)

【展覧会】

「一笑一顰(いっしょういっぴん)―日本美術に描かれた顔―」
会期：2022年8月19日(金)～10月2日(日)

【入館料】

一般630円、高校・大学生420円、小学・中学生無料

▼前号でご案内いたしました企画の公募には、予想を上回る多くのご応募をいただきました。私どもにとっては、じつに多様でユニークな研究に触れる機会となり、あらためて人文学のおもしろさを再認識いたしました。ご応募くださった皆様に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

▼昨年刊行の『洋学史研究事典』が日本医史学会の第34回矢数医史学賞を受賞しました。5年の歳月をかけて刊行を準備された編集委員の皆様、そして執筆にご協力くださった多くの方々の努力の結晶を評価いただいたことを、たいへんうれしく思います。

▼万博学研究会の最新の研究成果を発信する『万博学／Expo-logy』を創刊いたします。年1冊発行、弊社としては初めて電子版も販売する予定です。3年後に迫った大阪・関西万博の前に、魅力的かつ地に足の着いた議論を多くの方にお届けできれば幸いです。万博学研究会の新たな挑戦に、ぜひご期待ください。

▼3年ぶりに日本史研究会の大会での対面販売に参加します。そのほかの学会書籍展示への参加や感染状況の変化による予定の変更につきましては、SNS等で随時ご案内いたします。

▼行き詰まった時に思い出すのが色川武大の「全勝はありえない」「九勝六敗を狙え」という勝負哲学。出版業界で白星ひとつ取るのがどれほど難しいことか。年々、身にしみます。(R)

▼コロナが長引くなかでも、イベントの再開が少しずつ増えてきたように思います。この夏は3年振りの山鉾巡行で京都も少しにぎやかに。オフライン文化も大切にしたい。(大)

▼エアコンの風が苦手なのですが、さすがに暑すぎて使わざるを得ません。扇風機だけで過ごせるような高地に引越したいものです。はやりの二拠点生活にも憧れます。(m)

▼アクアリウム趣味は留まるところを知らず、狭い我が家の水槽はついに5つになりました。小エビやカニ、お魚たちを愛でながら、老後は私設水族館でも開こうかと夢想する日々。(n)

▼表紙図版・鶴淵初蔵案「教育必用幻燈振分双六」部分／松本夏樹氏所蔵／福島可奈子『混淆する戦前の映像文化』より

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.115

2022（令和4）年9月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町335

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン HON DESIGN

尾崎信一郎（鳥取県立美術館整備局美術振興監）著

戦後日本の抽象美術

— 具体・前衛書・アンフォルメル —

10月刊行予定

A5判上製・五二八頁／定価 八二五〇円



〔予定内容目次〕

第I部 具体とアンフォルメル

具体 絵画へいたるアクション／具体と山村コレクシオン／アクションの発見——具体、ポロック、カプロー／具体美術協会を再導入する／アンフォルメル その可能性の中心／吉原治良と写真の視覚／堂本尚郎 移動と断絶

第II部 書と抽象絵画

森田子龍と前衛書／書と抽象絵画——一九五〇年代の二つの美談／書とミニマル・アート／吉原治良と書／須田昶太の絵画／川端実のブレイクスルー

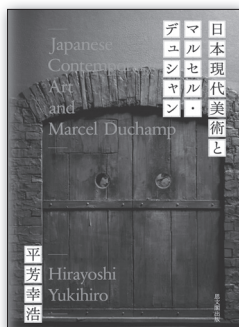
第III部 戦後美術を読み直す

一九五〇年代のキュビズム／アメリカの影／身体と場——日本の戦後美術におけるアクション／断絶の連続 戦後日本の抽象絵画

英文目次・解題

平芳幸浩著

日本現代美術とマルセル・デュシャン



A5判上製・三四四頁＋口絵四頁／定価 八、八〇〇円

なぜこれほどまでに、日本はデュシャンを好んできたのか。
一九二〇年代から八〇年代における日本の美術界および文化批評の場でのデュシャン受容の様態を確認し、日本の前衛美術や批評言語がどのように自らの方向性を見出してきたかを分析・考察する。

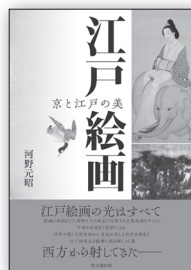
表示価格は税込

河野元昭（静嘉堂文庫美術館館長）著

江戸絵画 京と江戸の美

8月刊行

A5判上製・九七六頁／定価 一六、五〇〇円



江戸絵画の光はすべて西方から射してきた――。

探幽に始まる江戸狩野と、その源泉に位置する京都画壇を中心に、中国や西欧まで視野に入れ、将軍が愛した障壁画から庶民が楽しんだ浮世絵まで、江戸絵画史を縦横に読み解く34篇。

河野元昭著

琳派 響きあう美

A5判上製・八八〇頁／定価 九、九〇〇円



〔目次〕

- I 桃山障屏画論／2 江戸時代絵画／3 京画壇と江戸画壇――寛政から幕末へ／4 粉本と模写／5 浮世絵――江戸・上方・中国――／6 江戸絵画と客観主義／7 江戸の色／8 江戸の美学
- II 9 江戸狩野雑考／10 園城寺勧学院客殿二の間の障壁画／11 探幽と名古屋城寛永度造営御殿／12 探幽筆日光東照宮陽明門雲龍図天井画について／13 知恩院障壁画について／14 大徳寺本坊丈の探幽筆障壁画／15 醍醐寺三宝院宸殿障壁画はか／16 探幽を中心とする大徳寺玉林院障壁画／17 湯女図試論／18 寛文美人試論／19 葛飾北斎と中国画／20 国芳――幕末マニエリスムの画家――
- III 21 山雪と馬図／22 一七一六・京都・本草学／23 文人画と写生画Ⅰ――若冲・蕭白・蘆雪――／24 金毘羅障壁画試論／25 応挙と三井家／26 大乗寺と円山派作家付「大乗寺円山派関係文書」／27 文人画と写生画Ⅱ 円山応挙と呉春――／28 応挙の幽霊――円山四条派を含めて――／29 蘆雪試論
- IV 30 長谷川等誓の作品／31 月儼の作品／32 森狙仙研究序説／33 随想 秋田蘭画の花と鳥／34 ジャポニスムの起因と原動力

日本近世絵画史全体にわたる業績の中核をなす琳派研究を集大成。光悦・宗達・光琳など、琳派と呼ばれる芸術家たちが互いにどう影響しあい、独自の美を生み出してきたのか。今もなお人々を魅了してやまない才能あふれるクリエイターたちの実像に迫る27篇。

表示価格は税込

稲本泰生（京都大学教授）編

釈迦信仰と美術

二〇二二年冬刊行予定

A5判上製・約五五〇頁／定価 未定

釈迦の生涯を扱った仏伝美術を軸に、釈迦の「生」がいかにか捉えられたか、南北朝～南宋の中国に対応する時期の東アジアの事例を論じる。一方でインド・ガンダーラなど、その前史を構成する地域の状況も扱い、仏伝美術の形成・継承・変容の様相を横断的に浮かび上がらせる。また、近代日本画における理想的な仏陀の姿をめぐる論考など、今日へとつながる新たな研究視点を提示する。

宮津大輔著

現代美術史における 前衛書の

リポジショニング

―墨人会とその同時代表現をめぐる―

6月刊行

四六判・二七〇頁／定価四、九五〇円



〔予定内容目次〕

I 釈迦の生涯をたどる——仏伝と仏蹟巡礼の美術

いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現されたブツダと声聞衆（有部および大眾部）の仏身論について
南アジア初期仏教美術における聖地表象——仏伝図との関係を中心に（外村 中）
聖地と光の幻影——女神マリーチーをめぐる（島田 明）
ガンダーラ地方における初期の仏伝図の探究——ラニガト寺院址出土浮彫画像帯の分析から（マイケル・ウィリス）
安塞大仏寺四号窟における圖像構成の意義と北朝期の仏伝表象（内記 理）

II 釈迦の姿をあらわす——仏のかたち人のかたち

佛從何出生——ブツダイメージの中国化と二元化（岩井 共二）
草座釈迦像とその儀礼——宋元江南仏教儀礼の中世日本への伝播（西谷 功）
一休宗純「苦行釈迦図」——京都・真珠庵の図像の淵源（板倉聖哲）
天平様式観の形成——日本古典美術の構築と受容（中野慎之）

III 釈迦の不在をこえる——涅槃表現の諸相

初唐期及び奈良時代の涅槃表象と涅槃観（田中健二）
京都国立博物館蔵釈迦金棺出現図に関する諸問題——主題の観点を中心に（大原嘉恵）
「応徳涅槃図」再考——原本の存在とその絵画史的位置（増記 隆介）
達磨寺所蔵仏涅槃図考——釈迦の姿形と賛文を中心に（谷口耕生）

本書は、井上有一、江口草玄、森田子龍らの墨人会メンバーが、純粹な造形的原理と文字が有する意味表象が止揚する「美術としての『前衛書』」に至る道筋を、背景となる思想や社会状況から明らかにする。

さらには「書」と「美術」が東西の二項対立を越え、相互に影響を与えあった状況を抽象表現主義、アンフォルメル、具体美術協会などとの比較から論じることで、美術史における「前衛書」のリポジショニングを図るものである。

表示価格は税込

荒木浩著

【思文閣人文叢書】

『今昔物語集』の 成立と対外観

A5判上製・四六〇頁／定価九、九〇〇円

平安末期に成立したとされる説話集『今昔物語集』と、その根幹的な原拠という11世紀の源隆国「宇治大納言物語」。対外観という視点のもと、古代説話集の成立から『今昔物語集』の生成へという文学史、仏教文化史の潮流を論じる。

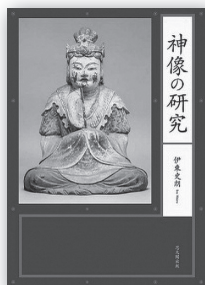
仏教世界の起源である仏伝の中に、日本だけにしか存在しない仏の遺言を語り伝え、和語で描こうとすること、また阿倍仲麻呂帰国説の生成など――、あまたの画期的な物語行為はいかにしてなされたのか。

伊東史朗著

神像の研究

4月刊行

B5判上製・三四四頁／定価 一三、二〇〇円



神像とは神の姿をあらわす彫刻であり、ご神体として尊ばれてきた歴史から、直接人目に触れる機会が少ない。仏像に比べ知られている作例が少なく調査の機会も限られてきた神像の研究は、仏像研究に比して遅れを取ってきたと言わざるを得ない。本書は、そうした状況を打破するべく、神像研究の基礎を築き、神像史を日本彫刻史の一分野として確立する試みである。

【目次】

はじめに――対象としての説話集史素描
序論 仏教文学としての説話集と対外観

第一部 古代説話集の成立と対外観

- 第一章 仏教類書の影響と説話集の存立――「諸教要集」をめぐる
- 第二章 「三宝絵」の捨身と孝――尊子内親王をめぐる
- 第三章 投企される〈和国〉性

第二部 源隆国と「宇治大納言物語」――説話集と作者の環境

- 第一章 源隆国の才と説話集作者の資質――研究史再考から「宇治大納言物語」へ
- 第二章 源隆国晩年の対外観と仏教――宇治一切経蔵というトポスをめぐって
- 補論 藤原忠実の「家」と「父」そして「子」――言談・説話の中の院政期

第三部 『今昔物語集』の成立と宋代

- 第一章 『今昔物語集』成立論の環境――仏陀耶舎と慧遠の邂逅をめぐって
- 第二章 『今昔物語集』の成立と宋代――成尋移入書籍と「大宋僧史略」などをめぐって
- 第三章 かへりきける阿部仲麻呂
- 第四章 『今昔物語集』の宋代観と和歌逸話の形成
- 補論 編纂動機と逸話配列――紀貫之の亡児哀傷と『国文学史講話』をめぐる
- 終章 世界叙述と説話文学史――矜持する和語

表示価格は税込

園城寺監修／園城寺の仏像編纂委員会編

園城寺の仏像 第五卷

南北朝／江戸彫刻篇

二〇二三年冬刊行予定

A4判上製・約三六頁・化粧函入／定価 未定

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕一千二百年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全五巻の最終巻。

(既刊4巻揃 七二、六〇〇円)

高梨純次著

近江の古像

主に八世紀から一世紀の近江の古仏についての研究成果を集成する。

定価 九、九〇〇円

菅田祐準著

西山證空上人とその思想

證空上人の生涯とその思想・足跡を辿る。

[Shibunkaku Works]

九月刊行

定価 六三八〇円

〔予定内容目次〕
中世後期以降の彫刻史研究

- | 図版 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|--------|---------|-------|--------|----------|--------|--------|--------|--------|--------|----|
| 地蔵菩薩坐像 | 普賢菩薩騎象像 | 大黒天立像 | 地蔵菩薩坐像 | 宝冠釈迦如来坐像 | 釈迦如来立像 | 不動明王坐像 | 不動明王立像 | 業師如来坐像 | 不動明王立像 | |

- | 山本勉 | 福家俊彦 |
|-----------|---------|
| (唐院伝来) | (普賢堂伝来) |
| (普賢堂伝来) | (全堂安座) |
| (觀音堂伝来) | (觀音堂伝来) |
| (近松寺伝来) | (全堂安座) |
| (新羅文殊堂安座) | (觀音堂安座) |
| (電泉院安座) | (觀音堂安座) |
| (水鏡寺安座) | |

- | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-------------|--------------|---------|---------|---------|---------------|-------------|-----------|----------|------------|---------|-------------------|
| 弁才天坐像 | 252 | 222 | 221 | 201 | 181 | 171 | 161 | 151 | 141 | 131 | 121 | 11 |
| 弁才天坐像 | 阿彌陀如来及び両脇侍像 | 宝冠釈迦如来及び両脇侍像 | 弁才天坐像 | 弁才天坐像 | 十一面觀音立像 | 補遺1 毘沙門天立像 | 補遺2 十一面觀音立像 | 補遺3 大黒天立像 | 補遺4 天部立像 | 補遺5 文殊菩薩坐像 | 調書・解説 | 江戸時代の仏像／仏像銘文集成／付録 |
| 滋賀県指定文化財 金剛力士像 | 聖觀音坐像 | 毘沙門天立像 | 毘沙門天立像 | 二十八部衆像 | 釋迦羅童子立像 | 釋迦羅童子・制吒迦童子立像 | 近松寺光寺堂安座 | 唐院三重塔伝来 | 長日護摩堂安座 | 法明院安座 | 新羅文殊堂安座 | 新羅文殊堂安座 |
| (法明院安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) | (觀音堂安座) |

菱川哲郎・吉川真司編

古代寺院史の研究【オンデマンド版】

分野横断的な視点で古代寺院史研究の新天地を拓く。

定価 一四、三〇〇円

中野玄三著

続々日本仏教美術史研究

中野氏による50年に及ぶ仏教美術史研究の集大成。

定価 一八七〇〇円

表示価格は税込

奈良国立博物館編

正倉院宝物に学ぶ4

二〇二三年10月刊行予定

四六判並製・約三二〇頁／定価 四、一八〇円

日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院宝物の様々な面を報告・討論するシリーズ最終巻。2014～2016年正倉院学術シンポジウム「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」「正倉院と奈良国立博物館」二二〇年のあゆみ」「正倉院正倉」の成果を収録。

〔予定内容目次〕

第一部 正倉院宝物に日本文化の源流をみる

〔正倉院学術シンポジウム2014〕

正倉院宝物の性格について

正倉院宝物にみる資源の有効利用

日本工芸の源流としての正倉院宝物

パネルディスカッション「正倉院宝物に日本文化の源流をみる」

（北 啓太）

（飯田剛彦）

（内藤 栄）

第二部 正倉院と奈良国立博物館／二二〇年のあゆみ

〔正倉院学術シンポジウム2015〕

北村家三代の漆工芸

（北村昭彦）

米田談典著

正倉院の香薬―材質調査から保存へ

宝庫に伝存する香薬の材質調査の成果から、有機物の「文化財」保存とは何かを問う。

定価 二、〇〇〇円

木村法光著

正倉院宝物と古代の技

長年正倉院宝物の調査・研究、保存・管理に携わってきた著者の研究成果。

定価 一六、五〇〇円

奈良国立博物館と正倉院の伝統

正倉院管理の沿革と正倉院事務所の伝統

森鷗外と正倉院

パネルディスカッション「正倉院と奈良国立博物館」

（湯山賢一）

（杉本 樹）

（田良島 哲）

第三部 正倉院正倉（正倉院学術シンポジウム2016）

正倉と正倉院宝物

正倉院正倉整備工事の成果

奈良時代平瓦から見た正倉院正倉

平安時代の御物と御蔵

パネルディスカッション「正倉院正倉」

（杉本一樹）

（春日井道彦）

（岩永省三）

（倉木涼子）

尾形充彦著

正倉院染織品の研究

染織品の整理・調査・研究に従事してきた著者による正倉院染織品研究の集大成。

定価 二二、〇〇〇円

近藤好和著

日本古代の武具―『国家珍宝帳』と正倉院の器仗

日本古代の器仗を理解するための基本図書。

定価 九、三五〇円

表示価格は税込

京都大学文学部日本史研究室・藤井讓治編

【京都大学史料叢書】光豊公記

10月刊行予定

A5判上製函入・約三七八頁／定価 一六、五〇〇円

近世初頭にかけて代々武家伝奏を務めた勸修寺家十四代当主、勸修寺光豊の日記。十六歳の天正十八年正月朔日にはじまり、没年（三十八歳）の慶長十七年正月十一日に及ぶ。本日記は、一九六三年に京都大学文学部国史研究室の所蔵となった勸修寺家文書の一部であり、現在は京都大学総合博物館収蔵。一年を通して残されているのは、天正十九年と慶長十五年のみであり、天正十八・二十年・文禄二・五年、慶長二・三年・八・十二・十六・十七年は一部が伝わる。この他に文禄三年から慶長四年までの八朝の記事を集めた「八朝記」と慶長十六年五月二二十一日から六月二十三日までの駿府・江戸下向の旅日記「東記」を収録。

京都府立京都学・歴彩館編

東寺百合文書十五 又函三・ル函一

9月刊行予定

A5判上製函入・四六八頁／定価 一五、四〇〇円

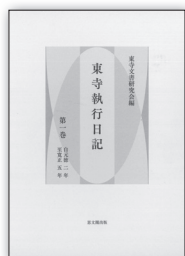
東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（二〇一五年ユネスコ世界記憶遺産に登録）。本史料集には「ひらかなの部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナの部」を翻刻。二年ぶり待望の第十五巻。

東寺文書研究会編

東寺執行日記 第一巻

3月刊行

A5判上製函入・三〇〇頁／定価 一五、四〇〇円



執行は長官僧である東寺長者系列の寺内の要職。堂舎・仏像・各種儀式の法具などの管理・保全の責任者であり、寺内の庶務を担当した。本日記はその公務記録で、鎌倉時代末期から近代にいたる長大な記録が残る。当時の政治・社会の中心である京都政界・社会に関する、長期にわたる定点観測の貴重なデータを提供する。全三巻。

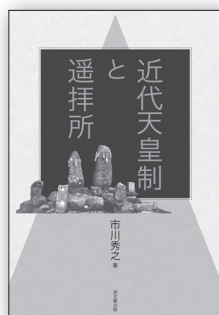
表示価格は税込

市川秀之著

近代天皇制と遥拝所

5月刊行

A5判上製・二七六頁／定価 九、九〇〇円



神社の境内などで見かける「遥拝所」と刻まれた石碑は、今日の我々の生活のなかではほとんどその意味を失っている。しかしながら、その石碑が建立された背景を探るなかで、この遥拝所碑は一九四五年までの日本人の生活と精神を大きく規制した「遥拝」の歴史を今も我々に伝えるものであることが明らかになっていく。

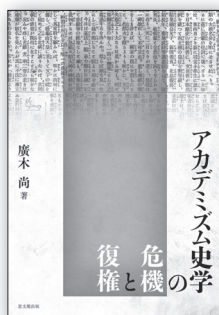
本書は、遥拝所および遥拝儀礼の歴史をたどる中で、近代における民衆の生活文化と天皇制がどのような関係性を持つに至ったのかを具体的に明らかにすることを試みる。

廣木尚著

アカデミズム史学の危機と復権

3月刊行

A5判上製・二七三頁／定価 九、三三〇円



近代日本の歴史研究において、中心的存在であったアカデミズム史学は、いかなる時代状況のなかで生まれたのか。坪井九馬三、黒板勝美らアカデミズム史学に連なる歴史家たちの実践から、無思想ともみなされてきた存在の思想性に迫る。

【目次】

- 第1章 近代の遥拝と遥拝所
- 第2章 開港地の遥拝所
- 第3章 明治前期の東京府内の遥拝所
- 第4章 遥拝所と公園
- 第5章 開成山遥拝所
- 第6章 神宮教会と遥拝所
- 第7章 遥拝所の制度史
- 第8章 明治天皇の大喪と遥拝儀礼
- 第9章 遥拝をめぐる事件史
- 第10章 滋賀県東南部における近代遥拝所
- 第11章 奈良県下における近代遥拝所
- 第12章 昭和四年伊勢神宮遷宮とカトリック系学校における遥拝問題
- 第13章 宮城遥拝

表示価格は税込

新見まどか（大阪大学大学院助教）著

唐帝国の滅亡と東部ユーラシア —藩鎮体制の通史的研究—

12月刊行予定

A5判上製・約三〇頁／予価九、三五〇円

八世紀半ば、華やかな文化と広大な版図を誇り絶頂にあった唐朝は、安史の乱により滅亡の危機に瀕した。しかし唐朝は、この危機を乗り越え、乱ののち約一五〇年もの長きにわたり命脈を保った。では唐朝を存続させたものは何だったのか、また、なぜ安史の乱から一世紀半を経て滅びることとなったのか。本書は安史の乱後に整備された支配体制、すなわち藩鎮体制の形成から崩壊、終焉までを、唐国内の要因だけでなく東部ユーラシアの情勢変化と結びつけて跡付けることで、唐朝の存続と解体の過程、そして滅亡の意義を解明する。

洋学史学会監修

青木歳幸／海原亮／沓澤宣賢／佐藤賢一
イサベル・田中・ファンダーレン／松方冬子

編

洋学史研究事典

第34回矢数医史学賞 受賞

B5判上製・五一六頁／定価 一四、三〇〇円



洋学史学会設立30周年記念出版

◎グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。

◎地方史誌類の編纂事業や地域史研究の隆盛を踏まえ、全国各地に蓄積された洋学史の研究成果を収録。

◎研究篇（グローバル）と地域篇（ローカル）、ふたつの視座からの複眼的な編集。

◎各項目は1頁もしくは2頁で構成され、簡潔に研究情報を把握できる。各項目末には参考文献を収録。

◎歴史研究を志す若い研究者はもとより、洋学史に関心のあるすべての方へ、これからの研究の指針となる必備の書。

〔予定内容目次〕

序章 唐代藩鎮研究の現状と課題

【第一部】唐代藩鎮体制の形成

第一章 代宗期における藩鎮婚姻集団の形成とその背景

第二章 徳宗期における河北藩鎮を巡る婚姻関係——ウイグルの王女と唐の公主——

第三章 平盧節度使の軍事・経済活動と海商・山地狩猟民

【第二部】唐代藩鎮体制の変容

第四章 武宗期における藩鎮体制の変容——劉稹の乱を中心に——

第五章 徳宗期における藩鎮体制の崩壊——黃巢の乱と李克用の乱——

【第三部】唐代藩鎮体制の終焉

第六章 後梁の藩鎮体制と河北経略

第七章 燕の興亡と沙陀・契丹の擡頭

第八章 王氏成徳政権の終焉と沙陀の後唐建国

終章 唐帝国の滅亡と東部ユーラシア

表示価格は税込

堅田智子（関西学院大学助教） 著

アレクサンダー！

フォン・シーボルトと

明治日本の広報外交

「予定内容目次」	
序章	美しき平和の国日本
第一章	「視覚」と「文字」による広報外交の誕生
第二章	広報題材としての歴史と法
第三章	「各国政況報告」と「外字新聞論調報告」
第四章	「外国新聞操縦」
第五章	
終章	

今冬刊行予定

A5判上製・約六〇〇頁／定価 一〇、四五〇円

ペーター・パンツァー／香澤宣賢／宮田奈奈編

1873年ウィーン万国博覧会

―日頃からみた明治日本の姿―

4月刊行

A5判上製・三二〇頁／定価 九、六八〇円

寺本敬子 著

パリ万国博覧会と

ジャポニスムの誕生

第5回ジャポニスム学会奨励賞 受賞

好評4刷

A5判上製・三七〇頁／定価 七、一五〇円



一八六七年と一八七八年、ふたつのパリ万国博覧会を舞台に、「アジア」のなかに埋没していた日本のイメージが次第に像を結び、やがてジャポニスムという「熱狂」へと収斂していく。日仏両国の史料を駆使し、開催国フランス、参加国日本、パリの観衆、三者の相互作用を通じてジャポニスムの誕生を解き明かす。



日本・オーストリア双方の視点、日本政府に関わった外国人の視点から日本のウィーン万博参加を複眼的に検討することに加え、各分野で進む最新の研究を集成することで、従来の「殖産興業政策への貢献」という評価にとどまらないウィーン万博像を描出する。

アレクサンダー・フォン・シーボルトは明治日本の外交官として活躍し、「日本帝国近代史の化身」とまで評された。彼は日本の外交官として約40年にわたりヨーロッパに身を置きながら、万博参加、条約改正交渉、日本の広報外交に携わった。とりわけ日露戦争期には黄禍論が渦巻く中で、ロシアと新聞操縦合戦を繰り広げた。しかし日本の外務省の公式記録などではその業績をたどることができず、忘れられた存在となっている。本書は日独双方の史料、とくにシーボルト家所蔵の新出書簡等を駆使して彼の半生を浮かび上がらせ、日本における広報外交史の始まりをドイツ人外交官の視点から解明していく。

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

創刊号（年一回刊行）

12月刊行予定

A5判並製・約一八〇頁／予価二二〇〇円

〔予定内容目次〕

〔特集・植民地なき世界の万博〕

●万国博覧会と「植民地」の消滅

——国際博覧会条約一九七二年改正を中心に

（佐野真由子）

●万国博覧会における「アフリカ表象」とアフリカ各国展示の歴史的な変容

（ウスビ・サコ）

●戦後の万国博覧会のパビリオンと音楽——前川國男を中心に（井上さつき）

●大阪・関西万博における途上国支援について——実務担当者の目線から

（一坂浩史）

●〈座談会〉対等であるとはどういうことか

（吉田憲司×佐藤仁×岩田泰×佐野真由子）

佐野真由子編

万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法

万国博覧会の様々な側面に着眼し掘り下げた論考32篇。

定価 九、三五〇円

万博のさまざまな側面をつぶさに研究することの向こうに、この世界の人間たちの歩みが赤裸々に浮かび上がってくる——。万博研究をリードする万博学研究会による最新の研究成果を毎年発信。論集『万博学——万国博覧会という世界を把握する方法』で打ち出した「万博学」という研究視角の、さらなる共有と深化をはかる新たな挑戦が、いま始まる。

創刊号では戦後の万博と植民地の関係の特集。万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。

〔万博研究の最前線〕

●日本製カメラの一九五〇年代——輸出と展示会と万博と

（白山眞理）

●一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と西郷従道

（関根仁）

●上野公園にみる「博覧会の分類」と「博覧会の遷移」

（省名真彦）

〔これも万博資料〕

●欧州の都会案内にみる、万博見物指南

（市川文彦）

●万博が登場する小説・映画

（岩田泰）

佐野真由子編

万国博覧会と人間の歴史

研究者、政府・業界関係者、アジア各国の研究者らとともに議論を重ねた共同研究の成果。

定価 一〇、二二〇円

表示価格は税込

ジラルデッリ青木美由紀（イスタンブール工科大学准教授補） 編著

オスマン帝国と日本趣味／ ジャポニスム

今冬刊行予定

A5判上製・約三〇〇頁／定価 七、一五〇円

日本趣味の美術工芸の品々はアジアとヨーロッパにまたがるオスマン・トルコ帝国の諸宮殿にもたらされ、宮廷を彩っていた。これらの品々はボスフォラス海峡に臨むイスタンブールの地に、どのような経緯で、いかにしてもたらされたのか？

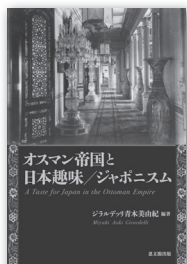
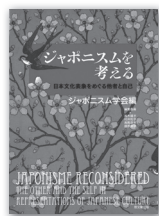
トルコ国立宮殿局が所蔵する日本製・日本趣味の美術工芸品を陶磁器・金工・刺繍・寄木細工等の専門家が現地調査した成果をもとに、草創期の日本・トルコの交流、そしてヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。

ジャポニスム学会編

ジャポニスムを考える

—日本文化表象をめぐる
他者と自己

A5判並製・三五二頁／定価 三、五〇円



〔予定内容目次〕

総論

トルマバフチェ宮殿の「SATSUMA」（渡辺芳徳）
日本磁器の始まりとトルコの近代宮殿所蔵の有田磁器の特色

〔コラム1〕

万博を通じた日本工芸品の広がり
（天橋康二）

〔コラム2〕

有田焼の場合
トルマバフチェ宮殿が収蔵する寄木のライティングビュロー
（金子皓彦）

〔コラム3〕

トルコのコーヒー文化
（清水克朗）

〔コラム4〕

イスタンブールのジャポニスムとアール・ヌーヴォー
（ジラルデッリ青木美由紀）

〔コラム5〕

東から西から——イスタンブール貴顕人名録
（山田寅次郎）

〔コラム6〕

近世オスマン宮廷の美意識と日本
（谷田有宏）

（ジラルデッリ青木美由紀）

ジャポニスムは、近年では「世界に向けて発信された日本文化」といった、越境的な時空で展開する日本文化表象および受容を広く示す言葉として流通し始めている。近代美術史や近代文学研究のサブフィールドとして捉えられてきたジャポニスム的な現象や表現、そしてその評価と批評には、今日のグローバルな文化における「日本」の座標を理解する有益な手がかりが多く含まれている。本書の狙いは、日本の外からあるいは日本の外を意識してイメージされた「日本文化」を研究する問題点と可能性を、ジャポニスム研究をリードする学者らが提起することにある。

表示価格は税込

小野芳朗（京都工芸繊維大学教授）著

風景の近代史(仮)

今冬刊行予定

A5判上製・約三五〇頁／予価五、五〇〇円

京都の桜、嵐山の紅葉と桜、御堂筋の銀杏並木、瀬戸内の島々、滋賀のはげ山（日本のアルプスと宣伝された）を具体事例として取りあげつつ、そこに風景を編集し、物語を仕立て、観光地を生み出す近代的な仕組みがあることを明らかにする。荒廃した森林の施業、都市計画、国立公園の設置など、行政はさまざまな要請から風景の編集を試み、時には歴史や物語にことよせその計画を正当化する。学者たちはそれにお墨付きを与え、さらに地域の住民はその物語をもって郷土を歴史に位置づけようとし、観光業者は風景を経済財として開発しようとする。風景の編集に關わる多様な人々に注目し、誰が風景を編集するのか、そして風景は誰のものかを考える。

小野芳朗／本康宏史／中嶋節子／三宅拓也編著

図説 大名庭園の近代

近代における大名庭園の変化の痕跡を、画像資料を中心に紹介。

定価六、六〇〇円

小野芳朗／本康宏史／三宅拓也著

大名庭園の近代

近代の歴史を掘り起こし、大名庭園の変容を明らかにする。

定価八、八〇〇円

小野芳朗編著

水系都市京都―水インフラと都市拡張

近代京都の都市史を水インフラという視点から論じる。

定価五、九四〇円

中川理編

近代日本の空間編成史

さまざまな分野から戦前日本の空間変容の実相を描き出す。

定価八、五八〇円

〔予定内容目次〕
序 論

第一章

京都の桜 ― 古都が桜で埋め尽くされるまで

第二章

嵐山の紅葉 ― 吉野の桜か、王朝の紅葉か

第三章

御堂筋の銀杏 ― 大阪計画と街路樹

第四章

瀬戸内海の島々 ― 風景の価値創造

第五章

滋賀のはげ山 ― 風景の価値転換

終章

風景と環境を考える

福島可奈子（武蔵野美術大学非常勤講師）著

混淆する戦前の映像文化

— 幻燈・玩具映画・小型映画

12月刊行予定

A5判上製・約四三頁十口絵八頁／定価九、九〇〇円

戦前の日本には、映画館以外の場所でも利用された「非劇場型」映像機器が多様多様に存在していた。時に家庭の娯楽として、時に学校や宗教施設で教育目的として受容されてきたそれらは、今では衰退し忘れ去られて久しい。本書では、その実態を掘り起こすため著者自身が十数年にわたって調査・分析し、撮影した明治・昭和（戦前期）の雑誌や企業広告、スライド、フィルムや映写機器等の一次資料を豊富に組み込み、戦前期日本で幻燈や玩具映画、駒フィルム、小型映画などの雑多なメディアが入り混じりながら技術的・産業的に発展・回帰・衰退していくさまを明らかにする。

また、多様に花開いた映像メディアが大衆の意識、あるいは無意識下に浸透すること、物の見方や娯楽のあり方、表現方法をどのように変えたのかという視点から戦前の大衆文化研究に一石を投じる。

アルバロ・エルナンデス編

メキシコ漫画イストリエタ―民俗文化としての漫画表現

イストリエタ研究のための重要なテーマや作者に関する一次資料も提供。

定価七、二六〇円

永井聡子著

劇場の近代化―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場

さまざまな資料や西洋との比較を通して、日本の劇場の近代化の特色を描き出す。

【オンデマンド版】

定価五、〇六〇円

〔予定内容目次〕
はじめに メディア考古学という方法

第Ⅰ部 映像メディアの大衆化―幻燈全盛の時代

第1章 社会教育ツールとしての幻燈――鶴淵幻燈舗を中心に
第2章 布教活動としての幻燈――中島待乳と池田都築を中心に
第3章 口演童話「お伽噺」と幻燈――雑誌「少年世界」の幻燈利用

第Ⅱ部 子供たちの映像文化―玩具映画全盛の時代

第4章 幻燈から活動写真のはざま――家庭用映像機器広告にみる混淆
第5章 視覚玩具文化とその流行
第6章 玩具映画の産業構造

第Ⅲ部 アマチュア映画と教育映画のナショナルリズム

―小型映画全盛の時代

第7章 フランス小型映画の世界市場戦略と日本
第8章 混淆する小型映画の栄枯盛衰――国家統制の陰
第9章 「教育映画」から「文化映画」、そして幻燈復活へ
おわりに

竹内幸絵／難波功士編

広告の夜明け―大阪・萬年社コレクション研究

明治から戦前までの広告業界をさまざまな角度から活写する。

定価五、七〇〇円

稲賀繁美編

海賊史観からみた世界史の再構築

文化交渉・交易全般―交易と情報流通の現在を問い直す
における「海賊行為」を総合的に再検討する。

定価一、五四〇〇円

表示価格は税込

古画備考研究会編 〔待望の重版!〕

校訂 原本 古画備考(全5巻・付牽引)

11月増刷予定 A5判上製函入・総三三四頁／定価七七、〇〇〇円

岡倉天心の座右にもあった、江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に再現。近代に編集された『増訂 古画備考』を大胆に革新。現代の視点から、美術史成立前夜における江戸の学知の達成を世に問い直す、古画備考研究会による永年の成果がここに完結。

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎編著『古画備考』巻一(四十八嘉永3=1850年起筆)を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻、項目索引を付す。

◎原本に含まれない巻四十九(五十一)は東京国立博物館蔵『古画備考』(図書寮印本)を底本に同様の校訂を行う。

◎太田謹増訂本 明治36=1903年初版、明治45=1912年校訂増補第二版、弘文館刊/昭和45=1970年復刻、思文閣刊)と、その底本である東京国立博物館蔵本(図書寮印本)より校合を行いその校異を註に記載。

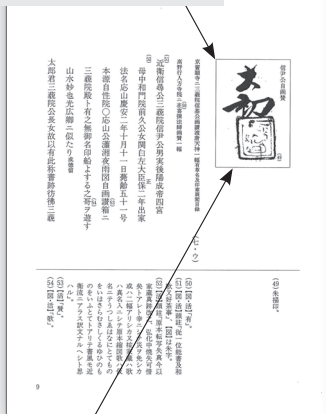
『古画備考研究会』

翻刻・校訂分担者：相澤正彦(成城大学)／五十嵐公一(大阪芸術大学)／井田太郎(近畿大学)／出光千子(青山学院大学)／出光美術館／北野良枝(元東京藝術大学)／高橋真作(文化財活用センター)／東京国立博物館／玉蟲敏子(研究会代表、武蔵野美術大学)／鶴岡明美(昭和女子大学)／並木誠士(京都工芸繊維大学)／成澤勝嗣(早稲田大学)／野口剛(根津美術館)／畑靖紀(九州国立博物館)／本田光子(愛知県立芸術大学)／宗像晋作(大分県立美術館)／山口真理子(城西国際大学水田美術館)／吉田恵理(静嘉堂文庫美術館)

(以上、本書に関わるメンバーのみ。＊は編集委員、50音順)

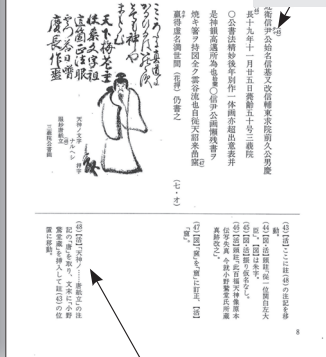
【 組み見本：巻三 廷臣二 近衛信尹の項 】

増訂本では区別できなかった貼紙箇所を明示。



【画像】図、署名、印、画賛等の部分は、原本画像をそのまま掲載。原本に忠実なレイアウトを復原。

【翻刻】増訂本編集時に割愛されていた小字註など、丁寧に翻刻。増訂本では知りえなかった情報が掲載されている。



【脚註】図書寮印本、太田謹増訂本との校異を掲載。どのように校訂されたかが、簡潔にわかる。

思文閣グループの
逸品紹介

美^びの縁^{よすが}



★ 河井寛次郎 黄蘗硯

河井寛次郎は近代を代表する陶芸家の一人。戦前には「用の美」を意識した制作で民藝運動を進め、戦後は自由な感性で独自の作風をひらいた。本作は丸みをおびたフォルムが愛らしい陶硯である。黄釉の味わい深い発色は、「釉薬の河井」と呼ばれた寛次郎の釉薬研究のたまものといえよう。

寛次郎本人が認めた箱には「昭和十一年製」とある。もともと中国・朝鮮の硯に関心のあった寛次郎は、昭和10年発行の『工藝』58号の硯特集をきっかけに硯への創作意欲が高まったといい、さっそく翌年の正月から陶器の硯の制作にあけくれた。同年の4月には東京・高島屋で「陶硯百種展覧会」を開催している。本作が展覧会に出品されたかは不明であるが、同時期の、硯への情熱に突き動かされる中で生まれた作品であることは間違いない。寛次郎と深い親交をむすんだ民藝運動の父・柳宗悦は、この頃の寛次郎について「恐らく河井の今までの生涯中、こんなにも血をわかつて制作したものはない。まるで憑かれた者の如く陶硯の創作に熱中した」と語り、「河井に色々の優れた作品はあるが、全体として最も素晴らしい行績は、その陶硯に見られる」と絶賛している。

（思文閣本社編集部・小橋慧子）



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 531-0001 FAX (075) 531-5533<https://www.shibunkaku.co.jp/>info@shibunkaku.co.jp 思文閣公式 Twitter

大入礼会・個展情報等、随時更新中

@G_SHIBUNKAKU

SHIBUNKAKU

思文閣

思文閣古書資料目録



光悦書・宗達下絵
四季草花下絵千載集和歌巻
(田中親美製) 一巻

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っており
ます(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問
い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155<https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>kosho@shibunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル

「Shibunkaku Works」

思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 533-6860 FAX (075) 531-0009<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>pub@shibunkaku.co.jp